人間の福音的実存七相

第四相　内住・常燃

真の葡萄樹

ヨハネ15・1～9

【目次】

# ●本体と影像

「われはまことの葡萄の、わが父は農夫なり。」（ヨハネ15・1）

イエスは、自分がまことの葡萄の樹だという。それは、例えば、私が机上に飾られてある菊の花を見て、「私が本当の菊の花です」というのと同じことである。それはちょっとおかしいではないかと思われる。「私はこの菊の花のようなものだ」というならわかるけれども。ゲーテの『ファウスト』第二部の最終の一段の詩句に

"Alles Vergӓngliche

Ist nur ein Gleichnis."

「すべてうつろいゆくものは影像に過ぎず」

というのがある。現世において我々が見、聞き、触れるこの移りゆくなきものは、影像、似姿にすぎない。本体界の本体がこの現象界に投影しているにすぎない、本体は彼岸にあるというのである。どんなに鮮やかに水に映っている鳥の影もそれは影であって、鳥は空を飛んでいる。プラトンもそういう角度から現象界を見ていた。

ところがイエスは、「自分が本ものの葡萄の樹」で、普通の葡萄の樹は影像だといわんばかりの語調である。イエスはまことに、天界のロゴス・キリストが、現象界にサルクス・キリストとして、受肉のキリストとして現象していたわけである。それで

「我はまことの（アレーティネー）葡萄樹なり」

といった。本体界の実在（エッセンシア）が現象界に実存（エクシステンシア）として投じ出でたということは、まことに

「日の下に新しきことなし」（伝道1・9）

という事態を破った新しきことであった。イエスの「我はまことの葡萄の樹」とはそういう事態の表現として実に重大な内実のものである。自然界の葡萄の樹は枯れることがある。けれどもイエスという葡萄の樹は枯れない。

これと同じ様なことをイエスはサマリヤの女に語った。即ちヤコブの井泉がどんなにすばらしい井泉であろうとも、ヤコブの井泉の水を飲む者はまた渇く。けれども私が与える「活ける水」を飲むものはいつまでも渇くことがないと。これはイエス自らがまことの井泉であることを語っていたわけである。即ち彼は霊泉で、その水は聖霊であることを示したわけであった（ヨハネ四章参照）。

これらはみんな、本体界の根源現実を現象界の現実をもって表現せんとしているわけなのである。イエスという人は、彼自身が、神を体現している神の「言」であり、神の「」である。それゆえ、

「我を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

といった。このような啓示的事実をどうしたら受けとれるかというなら、それは単なる理解でも、認識でも、研究でもない。信仰、信受、体受のほかあり得ない。聖書の世界は信仰的応答、行為的認識によるほかはない。

# ●神は農夫

「わが父は農夫なり。」

イエスにとって神は親しい父であり、聖なる霊であることは、同じくヨハネ福音書第4章のサマリヤの女との会話でわかる。ここでは農夫であるという。葡萄園を栽培する農夫のこと、葡萄園のことは、著しい例としてはイザヤ書5・1～7がある。また創世記9・20～27を見ればノアが農夫で葡萄園を作ったとある。その他葡萄は橄欖や無花果と共に聖書の所々方々に散見できる重要な植物であることは周知のことである。

農夫は季節や天侯をわきまえ、土壌の成分性質を知り、環境地勢に順応していろいろ按配するすべを心得ている者。そのような農夫として神にイエスは全幅の信頼を置いている。

# ●内住

「およそ我に在る枝にしてを結ばざるは、父これをとり除き、果を結ぶものは、更に果を結ばんためにこれを潔め給う」（ヨハネ15・2）

本当に「キリストに在る」者なら、果を結ぶのは当然であるが、「キリストに在る」という在り方が、観念的であるか、霊的であるかで、果を結ばぬか結ぶかにわかれることをキリストは語っておられる。葡萄の幹につらなっている枝でも、日あたりがわるかったり、虫に喰われたり、害虫が技の中にもぐりこんだり、風通しが悪かったりすれば、果を結ばないわけであるから、人間の現実でも、自分の信仰の在り方が、環境や運命や誘惑などでぐらついたり変ったりすれば、果を結ばぬことはいくらでもある。

「キリストに在る」ということが本ものであるとキリストの生命がはたらくから枯死することはない。そういう枝は果を結ぶから、キリストはいよいよ霊生をもって潔め給う。

「汝らは今や潔し、わが汝らに語りたる言に因りてなり。我に居れ。さらば我も汝らに居らん。技もし葡萄の幹に居らずば、自ら果を結ぶ能わざる如く、汝らもわれに居らずばまた然り。われは葡萄の樹、汝らはその技なり。我に居る者あらんか、我も彼に居らん。彼は多くの果を結ばん。我を離れんか、汝らは何ごともなし能わず。誰にてもわれに居らずば、技の如く外に棄てられて枯る。人々かれらを集めて火に投げ入れ、彼らは焼かるるなり。汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん。汝ら多くの果を結ばば、わが父これによりて栄光を受け給う。しかして汝らはわが弟子と成らん。父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。汝らわが愛に居れ！」（ヨハネ15・3～9）

以上のキリストの言には「居る」という語がたたみかけて出ている。原語「メネイン」は、あるものの中に「留まっている」、「宿っている」という意味の語であるから、枝が幹につらなって不可離のように、自分がキリストの中に宿ること、キリストがわが中に宿ることで、泊まり込む非常に生命的な親しみ深い言葉である。日本人にはよくつかめる事態である。信仰とはそのようにキリストの生命の中に宿り、泊まり、住むことで、常住的な事態である。

それではそれはどのようにして可能か、ということになると、どうしても深い祈りを要する。祈り入ることを要する。祈りとはおのれをキリストの中に投じ入れることである。それはどうして可能か。それはキリストの門を通ることを要する。キリストの門とは何であるか。それは十字架という門である。こういう漢字はないが、門構えの中に十の字を書いたらハッキリするだろう。十字架は罪のわれを無条件にゆるして通らせて下さる門である。

「われは門なり」

とはそういうことだと私は思っている。平伏して無条件にこの門を通らせていただくと、その先は聖霊の気の漂うすばらしい「緑の野べ」、「憩いの水ぎわ」で詩篇第23篇さながらの現実である。すなわち、わが首に聖霊の油がそそがれ、われという杯は聖霊の水であふれるのである。このように、十字架を真に受けとると、必然聖霊のバプテスマにあずかることになる。これを祈りにおいて深く体受することである。聖霊を賜わらずして、

「我キリストの中に泊まる」

とか

「キリストわが中に泊まる」

とか、申しても、それは空言にすぎない。観念的な信仰ではこの霊的な現実は本ものとならない。

ペンテコステにおいて弟子たちや女どもが一団となって心を合せ、ひたすら祈り続けていたところに聖霊が臨んだように、心を合せて祈る群に聖霊がのぞむ場合が多い。それでキリストがここでも「汝ら」といって複数で語っておられるわけである。エクレシア（召団、召されたる者たちの群、普通「教会」と訳しているが）とはそのように聖霊をうけた群のことであることを銘記すべきである。歴史的にはそのようにキリストをとし、聖霊を受けた群をとした構造の自覚で、この体がエクレシアである。それで「われキリストの中に」という個的な自覚が同時に、我らは互いにつらなる枝であるという連帯性と一体になっている。愛はこのように、縦と横との両面をもっているから、キリストが、神を愛することと、隣人を愛することとは一つだと言明している所以である。勿論聖霊を受けるということは深い祈りにおいて個的にも体験できるが、――預言者も使徒もそういう場合があった――聖霊は必ず愛としてはたらく霊である。

かくてキリストとの交り、内住関係は聖霊のバプテスマを通して、聖霊の内住を以って、現実となる。聖霊は火にもたとえられる。天来の愛の火であるから、この火はいかなる人生のあらしにも消えない、祈りをもって神・キリストと交っている限り。内住の霊、常燃の火として聖霊を有つことは実存の最も中心の事態である。

# ●結実

さて葡萄の根幹から枝葉に流れてくる樹液のように、人体においては心臓から血液が流れてくる。そして

「血は生命のあるところ」

とされている（創世記9章）。そのように、キリストの生命は、霊生で、聖霊のもつ生命である。であるから、み霊を宿してキリストとつらなるとき、謂わば霊血があるわけで、これが果を結ぶ源である。聖霊が結ぶ果は、パウロがガラテヤ書5・22で語っているように、

「愛、喜悦、平安及び平和、寛容、仁慈、善良、忠信、柔和、節制」

等である。また聖霊の賜物としては同じくパウロがコリント前書第12章で挙げている如く、

「智慧の言、知識の言、信仰、病を医す賜物、霊能の業、予言、弁霊の力、異言、異言を釈く能力」

等である。要するに聖霊はキリストに宿っている霊で、福音の原始核の如き驚くべき霊で無限無量の内実があるので、各個人の文化文明の健全な実存的ないとなみの原動力であることを銘記すべきである。20世紀の文化文明は、この聖霊をもつ福音乃至高次な宗教を根底にしない限り、非常に危いと言わざるを得ない。

# ●聖潔

キリストが「潔める」ということを言った。アンドリウ・マーレーの注解によると、この場合、旧き枝を相当深く技もと近いところから切り落とすことと類比の意味の由。柿なども枝をよく払わないと結実しがたい。信仰もつねに新たに旧き自分を切り棄てて進むを要する。信仰の事態で私心は禁物、無私の無が大切。しかし自ら潔まろうと、おのれの実存そのものを問題にしていると苦しくなる。所謂「潔め」派的な角度になっては、キリストの十字架は空しくなる。贖罪の血によって既に潔められているのである。「わが語りたる言」を端的に信受することによって「今や潔い」のである。

「永遠の御霊により、瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に仕えしめざらんや」（ヘブル9・14）

である。

「まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、恩恵の御霊を侮る者の受くべき罰の重きこと如何許りと思うか」（ヘブル10・29）

という聖言が確言している通りである。

キリストに躓いた祭司、律法学者、パリサイ人、サドカイ人たちは果を結び得ず、キリストに平伏し、泣き、叫び、しがみついた取税人、遊女、罪びと、病者、不具者たちは、まずイエスに救われ、やがて十字架の贖罪による潔めと聖霊による聖なる熱き愛の生命にあずかって本当に聖名を讃えることができたにちがいない。

# ●万能の愛

キリストが、上掲の如く、

「我を離れんか、汝らは何ごとをもなし能わず。……汝ら我に居り、わが言葉汝らに居らば、何にても望むがままに求めよ、さらば汝らに成らん」

と言っているように、み霊に在ってキリストに内住することをやめたら、霊的な力がなくなるから、本当のことができなくなる。またキリストの言は霊言で、聖霊と共にある言葉であるから、キリストの言葉が泊まるということと、み霊が宿るということは不可離である。それゆえに聖言がわがうちに泊まっていると、力があるから、望むことが成ってゆく。キリストの言は万願成就を約束するかの如くである。こちらの悲願はそれ以上の本願に包まれて成ってゆく。けれども現象や結果を問題にしてはならない。どう現象しようが、結果しようが、み霊に在っての悲願は根源現実において成っていることが確実であることを信じて往くのみである。み霊にある祈りの力はそこにある。聖霊は力ある愛の霊であるからである。み霊にある祈りの成就において、現われるのは神、キリストの栄光である。

「父の我を愛し給いし如く、我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」（ヨハネ15・9）

という言葉は聖書の中で極めて重要な聖句の一つである。イエスが神を信じぬいたのも、父なる神の愛に圧倒されていたからである。信ずるということは愛するということと一つのことである。信愛一如、愛信一体なのである。神がイエスに

「われ汝を愛す、汝を悦ぶ」

という声を降し給うたのは、ヨルダンでイエスが聖霊のバプテスマを受けたときであった。父の愛をみ霊において受けたキリストは、同じみ霊の愛を以って弟子どもを愛し抜いた。だからいよいよ

「わが愛に留まって居よ！」

と言った。ということは、み霊を宿してわが愛を受けて暮せよ、ということである。そしてその愛はまたおのずから隣人に流れてゆく。そうでないならそれは聖霊の愛ではない。聖霊の愛は火の如く燃え移り、泉の如く湧きて流れる。